

緩和ケアエッセンシャルドラッグ

恒藤 暁, 岡本禎晃 著

＜書評者＞ 渡邊 正 (公立学校共済組合東海中央病院病院長)

診療中にすぐ参照できるように、手の平に乗るような小型サイズ(B6 変)でありながら、緩和ケアに関する専門的・実践的知識がぎっしりと詰まった本書は、私には小さな巨人に譬えることができると思われた。それは本書が、①従来の小型版のほとんどが疼痛コントロールに限られているのに対し、緩和ケアで遭遇する多くの症状が網羅されていること、②著者の長年の経験から得られた臨床上のノウハウが随所に見られ、本書に息を吹き込んであるばかりでなく、実践的で有用な知識を提供していること、③緩和ケアの本質である全人的ケアの観点が貫かれていること、などの特徴を持っているからと思われる。

さて、本書は総論として症状マネジメントの原則と概説、各論として緩和ケアで用いられるエッセンシャルドラッグの解説から構成されている。先にタイトルにもなっているエッセンシャルドラッグであるが、世界保健機関 (WHO) が国際ホスピス緩和ケア協会 (IAHPC) に依頼して作成されたもので、そのリストは 2006 年の『Palliative Medicine』(Vol20,

p647-651) に公表されている。リストの作成に当たっては、緩和ケアで多くみられる症状を特定したあと、デルファイ法を用いて薬剤の効果、安全性、経済性などを検討し、必須薬として 33 剤を決定している。しかし、薬剤に関する説明はほとんど省略されているため、著者はこれらの必須薬をもとにわが国の実情に即して約 50 種類の薬剤を厳選した上で、各薬剤の用法、副作用、相互作用などについて詳細な解説を行っている。

総論の症状マネジメントの原則と概説では、癌性疼痛から始まり鎮静に至るまで、緩和ケアで遭遇する主な症状を 18 項目取り上げている。各項目は、概念、原因、方針、マネジメント、ケア、薬物療法などから成っているが、著者の長年の臨床経験をもとにケアに関する行き届いた記載があり、薬物療法とともに基本的なケアをしっかりと行うことの重要性を強調している。

著者の長年の経験はエッセンシャルドラッグの解説にも表れていて、薬剤使用の留意点を実際に即して書かれた「ポイント」の項は、診療に当たって大変役に立つ

と思われる。

がん対策基本法のなかで、緩和ケアの普及はがん治療の均てん化を進める上で重要な施策になっている。そのことはもちろん望ましいことであるが、緩和ケアが症状コントロールに矮小化されないように、緩和ケアの本来の意味や目標も含めて普及することが望まれる。著者は、「序：本書の目的」の中で、「緩和ケアでは全人的苦痛 (total pain) からの開放が中核である」、また「症状マネジメントは緩和ケア実践の手段であり、緩和ケアの目指すものはより広くて深いものである」とも述べ、症状コントロールの位置付けを明確にしている。そして薬物療法は“両刃の剣”という側面があるため、患者の QOL の向上には、効果だけでなく副作用にも十分注意した適正な薬剤の使用を常に心がけるように読者に配慮を求めている。緩和ケアが急速に普及する中で、本書はタイムリーに発刊されただけでなく、緩和ケアの本来のあり方を理論的、実践的に広めていく上で、日常診療の友としては是非手元に置いて参照していただきたい。

●三五変 頁 288 2008 年
定価 2,100 円
(本体 2,000 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00588-3]
医学書院 刊